

小島晋治編『いまアジアを考えるⅠ』

関口 真理

本書の目的はタイトルに明らかである。しかし、この短い表題と同じことが昨今、少なからず目に（耳に）ふれるように思われる。あるいは「アジア」の部分に、更に具体的な国名・地域名を入れてみたらどうだろう。現実に「アジア（又は各地域）を考える」、しかも「いま」それを行う要求が高まっているのは確かに違いない。

本書は一九八三年に中国研究所の主催で行われた「現代アジア講座連続講演会」を下敷きに、各講師が担当部分を執筆している。全二巻構成で、地域別区分によりⅠには東南アジア・インド・イラン・西アジアが、Ⅱには中国・朝鮮半島を中心とした地域がまとめられているが、紙面の都合上ここではⅠを中心に紹介する。

「アジアを考える」がテーマである、といっても、そもそもアジアとはいかなるものであるか。世界を便宜上地域

区分した結果生じた一つの範囲、としても、この広大な地域を「アジア」と呼ぶとき、我々は何らかの共通の概念に基いてこれを考えているのだろうか。おそらく「アジア」、又は「アジアを考える」と言った場合に我々が抱くイメージやアプローチの方法は無限に生じてしまうのでないだろうか。

本書においても、各執筆者の問題意識、アプローチの方法・表現は様々である。これを『いまアジアを考える』という一冊にまとめようとするからには、本書全体を通しての「アジアを考える」意味がなくてはならない。そうでなければいかに各章が優れていても脈絡無く並ぶだけで訴えるところも削がれてしまうであろう。

Ⅰ・Ⅱ各巻頭に編者である小島晋治氏による序がある。ここに短くこの目的に当ることが書かれている。紹介され

る地域に共通しているのは、現在の日本との関係が日々密接に、複雑になっていくということ。また国際的にその地域の動向が重要であり、日本との間に摩擦が生じている場合があるにもかかわらず、日本側の対応を見る限りその地域に対する理解が不十分（あるいはほとんど無い）であること。このような現状認識に立って、「もっと広くアジアを知り、アジアに対する考え方を直す」手がかりを作るということである。

序文はいずれも短く、内容に対する理解、反応は読者に任されている形であるが、私としては小島氏個人の「アジアを考える」をもう少し聞かせてほしかった。講演の段階からこの企画に関わっており、参加者の反応や個人的感想など含めて総括の可能な立場にあったと思われるからである。あるいは小島氏はあえてそれを省いたのかもしれないが。

さて次に巻の各章を簡単に紹介していく。

Ⅰ章は鶴見良行氏の「アジアはなぜ負しいか」である。著者は東南アジアの社会・経済研究をベースに、今日の日本に非常に密接した諸問題を提起し続けている。多くの実地調査や取材による著作には、我々が改めて知らされる日本の経済進出とアジア諸地域との葛藤、そして社会の現実が書かれている。本稿はそれら著作のエッセンスともいう

べきもので、東南アジア世界の舞台となる「マンガロープ沼地の社会と文化」がいかなる構成になるものかがまとめられていく。従来の社会・文化形成論では図式化できない、従って独自の社会発展が理解されなかった文化、陳腐な言い方をすれば「近くて遠い」隣人なのである。

Ⅱ章、森弘之氏の「インドネシア史における農民とプランテーション」は、インドネシア史を考える手がかりとして伝統的ジャワ農村社会を論じている。日本の社会科教育におけるインドネシアの引用を悪例にとり、地域の歴史を一貫性をもって考えるべきこと、そのためには社会の基礎にある「小さな民（ここでは農民）」の歴史に目を向ける必要があることを述べている。主な政権の交代や戦争のような事件を配列しても、なぜそのような事件が起きたのか、背景になる社会がいかなるものであったのかを追求しなければ事件の間に歴史的連続性は発見できない。インドネシアにおいて農民社会（とその要素―自給自足的農村共同体、慣習的規範概念など）は歴史的にも社会構成基盤の主要部分を担い続けてきた。それゆえに農民に視点を置いて考えることがインドネシア史再構成の大切な鍵となるのである。

Ⅲ章はジャーナリストイックナな立場からインドのケースと制とその最下層にある不可触民の問題を追いつけている

山際素男氏の「現代インドと指定カースト社会について」である。山際氏は長年にわたり直接、不可触民に取材し、なかなか触れることのできない彼らの生の声、差別反対運動の現場をとらえることに成功している。本稿に登場する不可触民差別と彼らの生活の実態はあまりにショッキングで、インドに住む者ならずとも「何とかならないのか」と思いたくなる。ところが現実のインド社会の複雑さはこれまで行われた方策がほとんど対応できない、あるいは拒絶されてしまうようなものなのである。山際氏の視点は「インドを考える」時に踏まえておかねばならない一極であると同時に、この現実を変えることのできないインド社会の構造をとらえる努力もされなければならないだろう。

次いでIV章は大野盛雄氏の「現代イラン社会の生活と文化」である。イラン革命によってその政治的立場がさらに注目されるようになったが、一方で革命の前後でイラン自体が全く変化したとか、その差が理解し難いと思うようになった人は少なくないであろう。大野氏は長年にわたる現地調査の中から特に民衆の日常的な生活文化（衣食住や農村・都市・遊牧の日常生活様式など）を紹介することにより「イランの人びと」の姿を生き生きと再現している。またイランの美しい自然がそこに深く結びついていることが印象深く書かれ、「イランの心のふるさと」のようなも

のを感じた。そこには革命の中にも生き続ける変わらない人々の暮しが発見される。大野氏は更に自身のイラン体験を研究論文ではなく人間ドラマとして著したいと述べておられる。大いに完成が期待されるどころだ（八五年十一月刊『イラン日記』NHKブックスはこの成果のひとつであろう）。

V章は山内昌之氏の「ソ連のイスラムと中東」である。「ソ連」、「イスラム」この二つの対象はそれぞれ単独に組み合わせることさえ簡単ではない。その二つが中央アジアで接し、現在のソ連は世界第五位のムスリム人口を有する。おそらくこれはイスラム世界の中でも特徴ある存在になっているはずである。そして中東情勢に対応するソ連は、このムスリムの存在を念頭に置かなくては考えられないというのが山内氏の論点である。そして同時に、先にあるようにソ連そのものの持つ歴史的、社会的な要素が実は深くこのムスリム問題と関わりを持っている。ゆえにソ連の対中東・イラン・アフガニスタン関係は我々が考える以上の重要性和柔軟性を持っていると言えよう。

最後のVI章が板垣雄三氏の「パレスチナ問題と日本」である。前章にも登場する、いわゆる中東問題はオイル・ショック以来ほとんどの日本人の意識するところとなった。しかし現実には、問題の土壌となっている歴史的経緯、

「イスラエル・パレスチナ問題の発生」や「大戦間の列強の中東政策」といった我々が多少なりとも常識のように思っているものにも事実関係などかなりの誤りがあることが指摘されている。他にも「パレスチナと日本」を考える前に我々が補わねばならない側面で本稿の大半が占められている（「アラブ」、「イスラエル人」の概念とはなど）。正直言ってタイトルほどには日本は関わってこない。我々の認識相応のものが日本の立場なのかもしれない。確かにパレスチナと呼ばれる地域は日本にとって最も遠い「アジア」である。

以上、I巻のみの紹介にとどめたものの非常に言葉足らずな書き方になってしまった。どれか一章に重点を置くべきであったかもしれないが、各章とも切り捨て難く、絞ることむくことができなかつた。私なりの要約とささやかなコメントを付すことで私の「アジアを考える」を少しでも察しただければと願う。

研究者が「なぜその問題に取組むのか」という問題は、常に研究者自身が実感していなければならぬし、受け手としても最も興味のある点であろう。しかし、それがいつも明らかに示されているとは限らない。本書において各執筆者は短い中にも自分の「いまアジア（各地域）を考えるのは？」を展開しているとみることができよう。

拙稿の不十分な点は直接本書を読んで補っていただきたい。また各章末に掲げられた参考文献リストはより一層のアプローチに好適であるので利用されたい。

小島晋治編『いまアジアを考える』三省堂選書

I 一九八五年七月刊 一六四ページ

II 一九八五年七月刊 二二〇ページ

（立教大学文学研究科博士課程前期課程）